

「外来腫瘍化学療法の質向上のための薬剤師の役割」について

10月18日の中央社会保険医療協議会・総会では、がん対策の議論の一環として、「外来腫瘍化学療法の質向上のための薬剤師の役割」について議論が行われましたので紹介いたします。

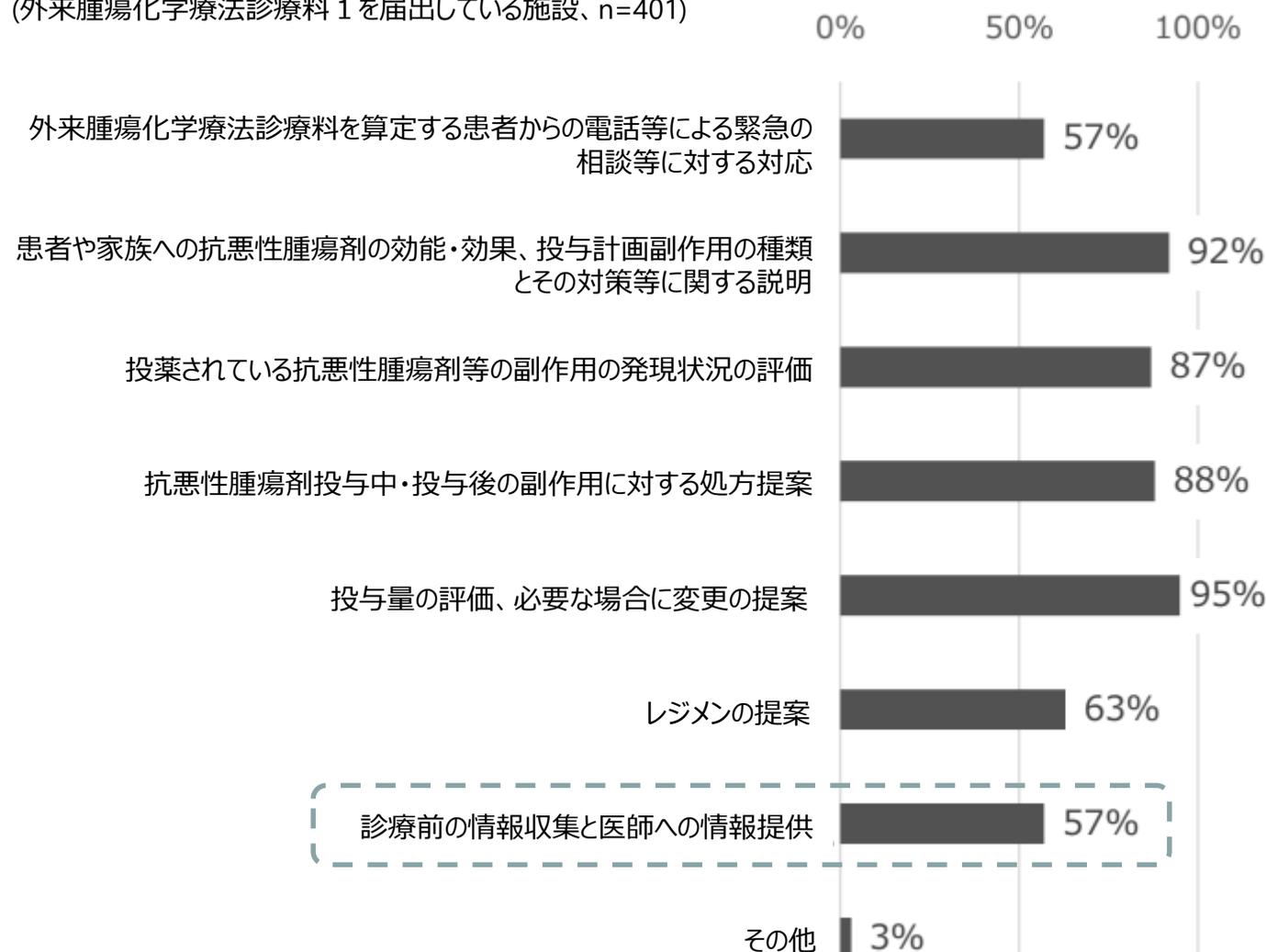
Topic解説

外来腫瘍化学療法における薬剤師の役割は、抗悪性腫瘍剤の調剤だけでなく、医師等と協働してインフォームドコンセントを実施し、薬局との情報連携を行うとともに、副作用に対する薬剤の提案等、高度な薬学的管理を実施することが求められています。今回、医師の診察前に薬剤師が服薬状況や副作用の発生状況等について薬学的な観点から確認を行い、医師へ情報提供や処方提案を行うことが有効であると、「医師の診察前の薬剤師面談」についての評価が議論されました。

外来腫瘍化学療法に従事する薬剤師が実施している業務について

副作用の発現状況の評価及び、処方提案、投与量の評価と提案、患者等への抗悪性腫瘍剤の説明等を薬剤師が実施している割合は高く、「診察前の情報収集と医師への情報提供」については、約6割の施設で実施されていました。

【図1】外来腫瘍化学療法に従事する薬剤師が実施している業務
(外来腫瘍化学療法診療料1を届出している施設、n=401)



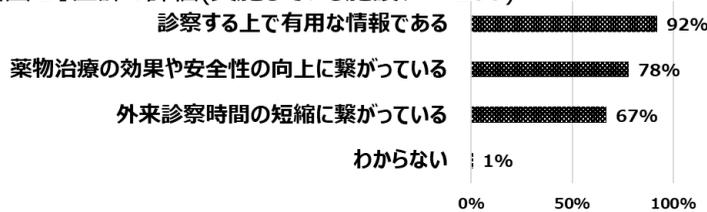
Topic解説

医師の診察前に薬剤師が関わることによるメリットについて

- 医師の診察前に薬剤師が関わる取り組みを行っている施設では、9割以上の医師は「診察する上で有用な情報」と回答し、約8割の医師が「薬物治療の効果や安全性の向上に繋がっている」と回答しました。【図2】

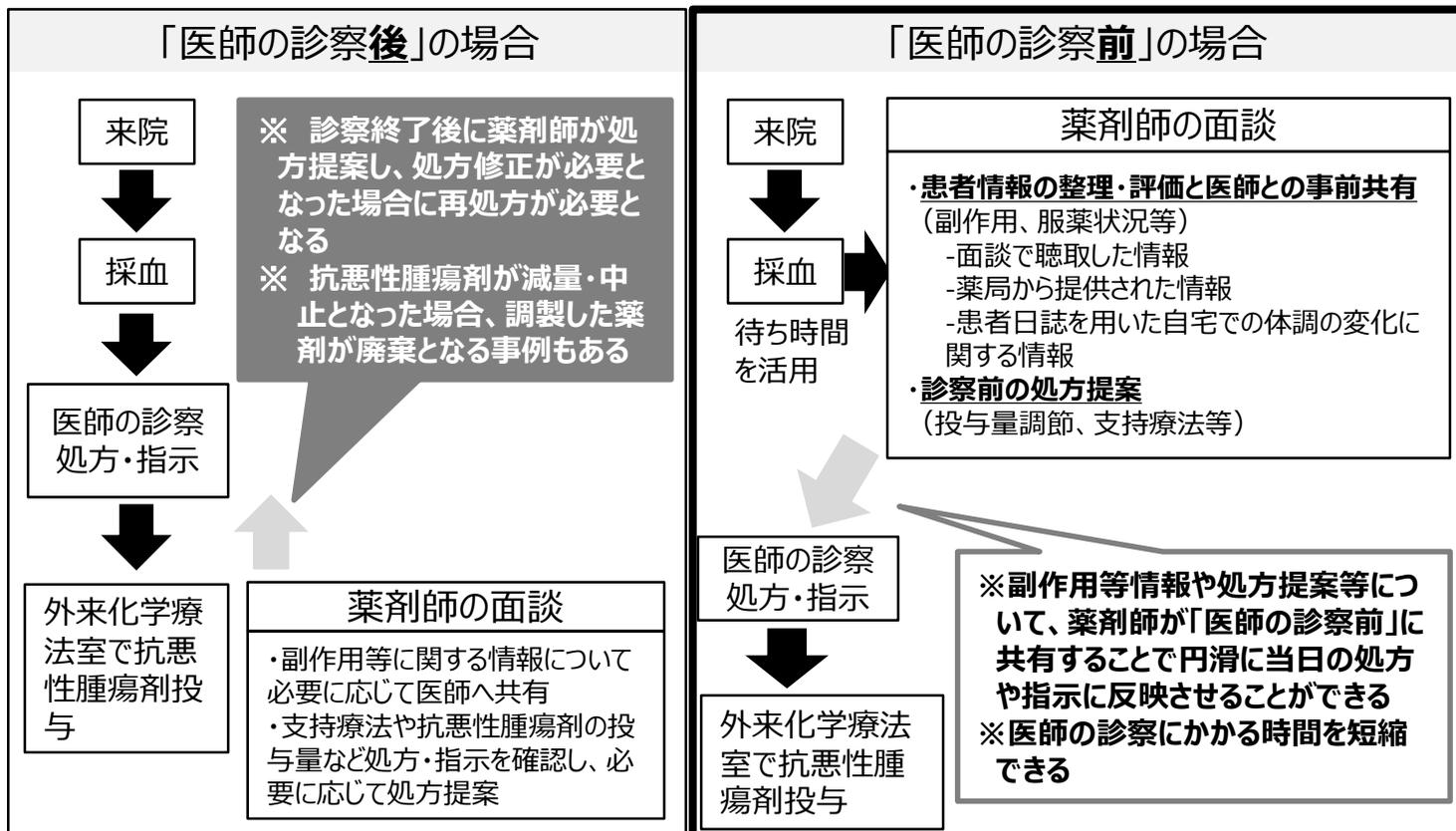
出典：日本臨床腫瘍薬学会が、がん診療連携拠点病院等を対象に実施したアンケート（2023年）データを元に保険局医療課で作成

【図2】医師の評価(実施している施設、n=135)



外来腫瘍化学療法の流れにおける薬剤師が関わるタイミングの違いについて

薬剤師が医師の診察前に服薬状況や副作用の発現状況等の確認を行い、医師に対して情報提供や処方提案等を行うことで、医師に処方修正等の追加の業務を発生させることなく、当日の処方や指示に反映でき、円滑に外来腫瘍化学療法が実施できます。



医師の診察前に薬剤師が関わった事例

- 支持療法の追加
腹膜癌に対して殺細胞性抗悪性腫瘍剤を用いたがん化学療法中。既に制吐剤を使用しているが吐き気が問題になっており、医師の診察前に面談し、吐き気の時期や重症度を制吐剤の使用状況と共に聴取。担当医に報告し、追加の制吐剤を処方して対処することとなった。
- 抗悪性腫瘍剤の用量調整
直腸癌で分子標的薬を含むがん化学療法中。副作用の皮膚症状に対してステロイド外用剤で対処していたが、副作用の悪化により疼痛が出現していることを聴取。医師と相談し分子標的薬の減量調節をすることとなった。
- 薬局との連携による支持療法の調節

出典：厚生労働省_中央社会保険医療協議会総会（2023/10/18）総-4

https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000212500_00218.html



発行元：東和薬品株式会社